

はじめのものに

ささやかな地異は そのかたみに
灰を降らした この村に ひとしきり
灰はかなしい追憶のやうに 音たてて
樹木の梢に 家々の屋根に 降りしきつた

その夜 月は明かつたが 私はひとと
窓に凭れて語り合つた（その窓からは山の姿が見えた）
部屋の隅々に 峡谷のやうに 光と
よくひびく笑ひ声が溢れてゐた

——ひとの心を知ることとは……人の心とは……
私は そのひとが蛾を追ふ手つきを あれは蛾を
捉えようとするのだらうか 何かいぶかしかつた
いかな日にもねに灰の煙の立ち初めたか
火の山の物語と……また幾夜さかば 果して夢に
その夜習つたエリーザベットの物語を織つた

またある夜に

私らはたたずむであらう 霧のなかに
霧は山の沖にながれ 月のおもを
投箭のやうにかすめ 私らをつつむであらう
灰の帷のやうに

私らは別れるであらう 知ることもし
知られることもなく あの出会つた
雲のやうに 私らは忘れるであらう
水脈みのやうに

その道は銀の道 私らは行くであらう
ひとりはなれ……（ひとりにはひとりを
夕ぐれになぜ待つことをおぼえたか）
私らは二たび逢はぬであらう 昔おもふ
月のかがみはあのよるをうつしてゐると
私らはただそれをくりかえすであらう

晩き日おその夕べに

大きな大きなめぐりが用意されてゐるが
だれもそれとは気づかれない

空にも 雲にも うつろふ花らにも
もつ心はひかれ誘はれなくなつた

夕やみの淡い色に身を沈めても
それがこころよさとはもつ言はない
啼いてすぎる小鳥の一日も
とほい物語と唄を教へるばかり

しるべもなく来て来た道に
道のほとりに なにをならつて
私らは立ちつくすのであらう

私らの夢はどこにめぐるのであらう
ひそかに しかしいたいたしく
その日も あの日も賢いしづかさか？

わかれる昼に

ゆさぶれ 青い梢を
もぎとれ 青い木の實を
ひとよ 昼はとほく澄みわたるので

私のかへつて行く故里ふるさとが どこかとほくあるやうだ
なにもみな うつとりと今は親切にしてくれる
追憶よりも淡く すこしもちがはない静かさで
単調な 浮雲と風のつれあひも
きのふ私のうたつてゐたままに

弱い心を 投げあげる
噛みすてた青くさい核たねを放るやうに
ゆさぶれ ゆさぶれ

ひとよ
いろいろなものやさしく見るので
唇を噛んで 私は憶いきてほることが出来ないやうだ

のちのおもひに

夢はいつもかえつていつた 山の麓のさびしい村に
水引草に風が立ち
草ひばりのうたひやまない
しずまりかへつた午さがりの林道を

うららかに青い空には陽がてり 火山は眠つてゐた
——そして私は

見てきたものを 島々を 波を 岬を 日光月光を
だれもきいてゐないと知りながら 語りつづけた……

夢は そのさきには もうゆかない
なにもかも 忘れ果てようとおもひ
忘れつくしたとさへ 忘れてしまつたときには

夢は 真冬の追憶のうちに凍るであらう
そして それは戸をあけて 寂寥せきりやうのなかに
星くずにてらされた道を過ぎ去るであらう

夏花の歌

その一

空と牧場のあひだから ひとつの雲が湧きおこり
小川の水面に かげをおとす
水の底には ひとつの魚が
身をくねらせて 日に光る

それはあの日の夏のこと！

いつの日にか もう返らない夢のひとつとき
黙つた僕らは 足に藻草をからませて
ふたつの影を ずるさうにながれにまかせ揺らせてゐた

……小川の水のせせらぎは
けふもあの日とかはらずに
風にさやさや ささやいてゐる

あの日のをとめのほほゑみは
なぜだか 僕は知らないけれど
しかし かたくつめたく 横顔ばかり

夏花の歌

その二

あの日たち 羊飼ひと娘のやうに
たのしくばかり過ぎつつあつた
何のかはつた出来事もなしに
何のあたらしい悔もなしに

あの日たち とけない謎のやうな
ほほゑみが かはらぬ愛を誓つてゐた
蘇あずみの花やゆふすげにいらまじり
稚をない いい夢がゐた——いつのことか！

どうぞ もう一度 歸つておくれ
青い雲のながれてゐた日
あの日たちのちらついてゐた日……

あの日たち あの日たち 歸つておくれ
僕は 大きくなつた 溢れるまでに
僕は かなしみ顫ふるへてゐる